

特別講演

第10回通常総会特別講演



「パプアニューギニアの誕生」

金沢大学法文学部助教授

助教授 畑中幸子

過分な御紹介にあずかり恐縮に存じます。
女性の方が半分位いらっしゃるの、女性に関する事でもというご注文がありました、パプアニューギニアに関する認識が欠けている時には余り意味をもちませんので直接にはテーマにいたしません。日本に近くて遠い国、パプアニューギニアが1975年に独立しましてまだよちよち歩きの国であるという事、パプアニューギニアに関して、私達日本人が非常に認識が浅いという事から、初めに簡単にニューギニアについてお話しいたしまして、それから問題を絞りたいと思います。
パプアニューギニアで私は7年半ほど調査研究をいたしました。人類学を勉強している学徒にとって未開社会は非常に魅力がありました。今日では「未開社会」という言葉を使う事が国連で禁止されていますが、非常に説明しにくいので私は話の上で未開社会、つまり西洋の物質文化のはいっていない、また現代社会と接触してから余り時間のたっていない

い社会を称して未開社会という言葉を使いお話しいたします。

20世紀にはいってもなお、石器を使用して数千年間ペールにつつまれたまま、誰からも知られる事なく続いてきたニューギニアの高地にニューギニアの人口の3分の2が密集していますが、そのことがわかったのはまだ30年ぐらい前の事です。第二次世界大戦前は人間がかなりいるらしい事がわかってはいたけれども、行政の力が及ばず、結局戦後、オーストラリア行政と接触いたしました。

わたしのお話いたしますニューギニアというのは、インドネシア領のイリアンジャヤを除き、パプアとニューギニア含めて国連の信託統治領で、オーストラリアが行政をおこなっていた地域です。

私が話題にいたします高地人社会は、比較的現代世界と接触がうすい部族社会で1968年に初めて発見されたグループです。私は文明社会が自滅の道を歩いているという印象を強

くもっているものですから、文明と縁遠い未開社会に非常に魅かれるものがあつたわけです。「文明社会自滅の道」と申しまして非常に抽象的な言葉ですが、例えば環境の破壊・公害・マスメディアによる感覚の画一化といったものもかかわっています。テレビとかマスコミを通して同じような物の考え方や感受性になっているということがあります。それから文化遺産や美に対する感動の欠如、それは学生をみているとよくわかるんです。私達、文化人類学者は異質の文化、つまり違った習慣や文化に目をみはりました。しかし（学生は）余り感動しない。それというのもかなりのアレンジの上映してきたテレビを通しての知識が既にあるからだと思います。他の学問ならともかく、民族学を勉強する者は好奇心がなければ始まりません。私が学生時代の時はチンドン屋が通っても2〜3人研究室の窓から首をだしてのぞいていくくらいなので、非常に好奇心が強かつたわけです。私が未開社会で研究している間にテレビができ、茶の間にてあちこちの国が見られるという環境になりました。学生はその環境で育つたわけです。授業で何かスライドを見せてもこっちが自分でしゃべりながらその写真を見て感動を新たにしても、見いている方はキョトンとし、ポーカーフェイスで聞いているため話のこしが折られることもよくあります。私はそれもやはり公害のひとつだと思っています。人類は文明社会の自滅の道にのつてしまったために、多くのことが裏目に出てきたといえます。人間が機械に使われ自主性が保たれなくなりました。その結果、私たちがしばしば口にするルソーの時代からうたわれてきましたヒューマニズムの問題は、もはやそれだけでは論じられない段階になっていると思います。ヒューマニズム云々以前にサモサピエンス、生物としての人間の生存が危ぶまれているからです。

時に未開社会を振りかえつて、どういふ事

が対照的に私の目に映つてきたか、そしてそこに住む人間がどういふ状況であるかといふ事を皆さんにお話ししたいと思つております。その一例としてバブアニューギニアの高地についてお話しするわけです。高地社会に人間が住みつuitしたのは2万年位前です。その頃は採取狩猟を行つておりました。世界史に登場することもなく、20世紀半ばまでヴェールの彼方で暮らしてきました。言い換えるならば、20世紀になつてもなお石器を使用していた。20世紀の石器時代人です。彼らが独立して現代社会に入り、国連に1議席をもつ国家を建設したのです。ニューギニアは未知数の資源を持っているだけに、日本はよだれをたらしながらコンタクトしているわけで、未開社会が独立した新興国といふことで、相手を軽視することは出来ません。日本政府も思ひ知つたことですが、国連の安全保障理事会の理事から落ちたことです。後進国を無視していたことがたつたわけで、バブアニューギニアの一票も日本にはこなかつたかと思ひます。日本政府としては、経済的にも政治的にも無視できないといふことで2年前でしたか、マイケル・ソマレ総理大臣と内閣のスタッフを日本政府が招待して、30億ドルのお金を貸しました。これから日本との政治的・経済的なつながりは、今後エスカレートするのではないかと私は見つております。

バブアニューギニアでも、海岸に住む人間と、それから高地に住む人間とは非常に生活が違つております。高地は完全な部族社会です。だいたい人間が700人から1,000人ぐらゐの者が血縁集団ごとに暮らしています。ですから嫁をとる時には、自分の部族のメンバー同士で結婚する事ができないから、自分達と同盟関係をもつている部族から嫁がくる。その「女を買う」といふ言葉があるわけですが、考え方によつては、文明社会もそうで、結納が上下していることは周知のことです。部族と部族の取引交渉があり、例えばA部

族からB部族にくるといふ通婚関係が成り立つわけです。ニューギニア、ソロモン群島及びその周辺の島々をメラネシアと申し、黒くてちりちりした髪の毛の人達がいる所です。メラネシア社会の特徴は、リーダーシップの問題で、リーダーになる人は世襲じゃないんです。実力のある者がいつでもなれる。その実力というのは、一体どのようにして獲得されるのか。例えば隣の部族から嫁さんを買う時、取り引きがあります。豚とか極楽鳥の羽根とかいろんなもので交換するわけですけど、その時の取り引きで、いかに少ない財貨でもって女を買う事ができるか、その取り引きを成功させた男、あるいはひと昔前ですと、部族間の戦争で武勇の名を挙げた、そういう人達が衆目の一致するところで実力者です。「親の七光り」というのはききません。そういう意味では、日本の社会とは違って、合理的と言えは合理的だし、気持ちのいい社会です。

高地社会における経済の変化ですけれども、1950年後半より換金作物のコーヒーと紅茶、そういう作物の導入が計られ、初めて自給経済から農業経済に移行しました。国連からの圧力もあったことです。民族自決というのは、第二次世界大戦後、どこの地域でも言われてどんどん独立いたしました。しかし、いまから20年前のオーストラリアは後進国で、自動車一台作れない国でした。その国が、日本の2倍半もあるパプアニューギニアを統治する能力なんかはありえないわけです。そういうわけで、教育はもちろんのこと、医療も全く進んでいなかったわけです。オーストラリアからの財政援助が第二次世界大戦が終わるまでなかったわけです。各港での関税でもって役人の給料を払うという状況の中で、学校もなく、病院もなく、ただわずかにバイブルスクールとか応急手当をほどこすミッションしかなかったのです。信託統治ニューギニアの開発が遅れているというので、国連の視察団のメンバーがひどく怒り、一挙に独立へのプレ

ッシャーをかけたわけです。私はその時、仕事をしておりまして、人類学を学ぶものとして、民族自決はもちろん当然のことだし、意見を聞かれた時も積極的に意志表示をいたしました。

ミクロネシア人、ポリネシア人にくらべましてメラネシア人は非常にバイタリティのある人間です。喜怒哀楽が激しく、日本人とすこし似ています。それに頑張り屋であること。動機づけとそれからあと押しと、それに援助があればどこまでもついてくる。そういうことを数年間のフィールドワークで実感としてもっていました。

ポリネシア人は二重まぶたのきれいな、うるんだような目で男性がひかれる顔です。ところが、メラネシア人は色は黒く、目は大きく、しかも輝いています。目を見ただけですぐわかります。メラネシア人は、彼らのコミュニティへコーヒーとか紅茶とか、換金作物の導入があった時に、白人のプランテーションから去り、白人企業に大きな打撃を与えました。白人たちに不当に使われていたことへの無言の抗議でもあったわけです。

文字も読めない、そして海も知らない、物の生産過程を何もみない未開人が、そのように目覚めていったわけです。私は、メラネシアというのは、長い尺度で見た時には、将来相当な国家になるのではないかと思います。政治成長といい、経済成長といい、劇的な変化がなされているわけです。ニューギニア高地で、まず文明を通すためには、道路を作らなければならない。その道路を作るために毎週一回勤労奉仕が強制されました。そして作った換金作物をトラックで出すのです。内陸部になりますと事情が異なります。一万フィート以上、富士山よりも高い連峰が続く、そういう奥地に住んでいる部族たちは、独立してからは逆に政府からなかなか平等な扱いが受けられず、結局、昔の状況に戻ったのではないかと考えられます。私が最初に調査いた

しましたシシミンという部族は1968年にオーストラリアの役人により発見されました。彼らは、採取狩猟と焼畑耕作と半々で生活していました。そこの人たちの生活が、いくらか私たちにとってエキゾチックな感じを与えるだけでなく、私たち文明社会の人間が考えさせられることがあるため、話にふれたいと思います。

この社会では非常に豚の価値が高いことです。豚と女が同等の価値ですし、場合によっては豚の値段の方が高くなる。ジャーナリストによりアレンジされた写真など御覧になって、高地人社会のんびりが皆裸でと思っていただけでは困ります。写真にあるような生活が本当にみられる未開社会へ行こうと思えば、容易なことではありません。それはヘリコプターを使い、何万ドルもお金を使うならば別ですが、普通の可能な予算では実際に未開人のところへ到達することは非常にむずかしいことです。食料から燃料など全部持っていかなければならないのですから…。だから、未開社会として映しているのは、ジープで入れるところの村で、脱がせていろんなことをやらせてみる、ということで、その生活とはすこし違うわけです。そういう写真の中でみなさんがお気づきになった方がいらっしゃるかもしれませんが、女の人のおっぱいの大きさが違うわけです。大体人間の体は、左右同じとはかぎりませんが、ここの女性は極端に違うわけなのです。それは、片方のおっぱいを豚に飲ましていたからではないかとオーストラリア人の医者から聞きました。つまり子豚の方が吸引力が強いというわけです。豚というのは、大体おっぱいの数より一匹多い子供を生みます。ですから、うすのろの仔豚はおっぱいからはずれ、他の豚は自分のおっぱいをキープするわけです。つまり、一匹だけがはずれ飢死するわけです。豚ってというのは、我々が考えているような動物ではなくて、利巧であって仔豚の時から縄ば

りをしっかりもっている。科学的には、私は自分でおっぱいを豚に吸わせたことがないからわかりませんが、豚を養った人には、片方のおっぱいが大きい人が多かったようです。こういうことがございました。自分の家の床下に朝4時頃からやって来た仔豚がなくものですから、うるさくて足で蹴とばしたのです。遠くから仔豚におっぱいを与えていた女の人でしょうか、びっくりして出てきてオイオイ泣きながら仔豚を抱きかかえていきました。えらいことをしてしまったと思ひまして、大変罪の意識にかられたわけです。

一方、男と女の関係は、日本の男と女の関係と非常によく似ています。この頃は女の人が強くなって、ご主人も奥さんの尻にひかれるという例もありますし、平等という考え方も出てきましたけれど、私なんか戦前に育っていますから、その社会で見た男と女という関係に比較されるわけです。やはりそれは、男中心の社会があるってことです。共通した所があっても不思議ではないと思います。

独立いたしました今日においても、豚はトラブルメーカーです。豚はゾロゾロ放し飼いですから垣を壊したり、豚とはいっても猪みたいなもので、鼻の力は相当なものです。その上豚はかしくくて、自分の主人の畑のいもは盗み食いしないで必ず他人の畑へ行くわけです。そして、木の柵のところに鼻をつっこんでぐっとあけ、母豚が入り、そのあとへ仔豚が入り、鼻で土を掘り、そしてさつまいもを食べ、そのあとちゃんと土をかぶせて帰ってくるわけです。こういうことが裁判沙汰になることもしばしばです。又、けんかの調停には、賠償として豚が請求され、それから嫁さんを買うときにも豚は絶対必要であるということ、そういうことでオセアニア、あるいはニューギニア“豚と文化”という題で博士論文が十分書けるのではないかと思います。

部族社会では、男は男で、メンズハウスで

暮しています。女と7才ぐらい以下の子供とはあとでお見せしますが、一軒の小さな家で暮しています。高地は寒いですから、家の中で火を焚きます。片方では女、子供がかやのような草を敷き、まん中に火をたき、片方には豚が休みます。今はやっていませんが、私が行った時は、まだ人間と豚が同居しておりました。私がお家を訪ねた時のことですが、豚がフーと息を吹きかけて来て、入るなというサインがくるわけです。ある時は、私が入って話していたところ、散歩から帰ってきた豚たちが、私の入っているのを見てすーっと行ってしまいました。

高地国道が通りました高地社会では完全な焼畑耕作が行われており、山には階段状にさつまいもが植えられています。この畑で女は、朝から晩まで働いているわけです。でかなりの労働です。いもや他の作物を網の袋に入れて帰ってくるわけです。子供と母親の関係ですが、子供は4才ぐらいで母親について畑に出ています。主食はさつまいもとタロイもですけれど、食料のとれる地域では、お母さんも乳が十分出るのでしょうか、子供はかなり大きくなるまで母親の乳にしがみついています。未開地域では、マラリアや栄養失調で出産率も非常に低いですし、生まれてきてもすぐ死ぬというケースが多かったようです。それでさつまいもが多くとれる比較的豊かなところでは、最近ではドクターボーイという診療所から派遣される看護夫がおり、10人生まれたら死ぬのは4人ぐらいに止まるようになりました。もっと未開地になると、数字が逆になるわけです。そういうふうにして子供が育つ確率が低い、特に未開社会では子供が死ぬということは、部族にとって非常に大きな衝撃で、自分たちの部族がだんだん人数が減っていくことを皆承知しているものですから、一人の命がなくなることに皆たいへんな騒ぎ方をするわけです。人間の命を大切にするという気持ちには、私たち以上に強いものがあります。

子どもと母親の関係と申しますと、文明社会では、非常に幼少期というものが長いわけです。何と申しますか、人間は大体他の動物と比べた場合、学習が行われる幼少年期が、他の動物に比べて非常に長いわけです。それも、文明社会になる程長くなるわけです。皆さん、新聞やなにかで御覧になって御存知だと思いますが、東京大学の学生を見て下さい。入学式、卒業式、就職試験についていくお母さんの姿、本当に髭もはえるという子どもに母親がついて行って、弁当やお茶をもって世話をします。常識を逸した行動です。文明社会では、過保護はしばしば批判されながらも改められない。未開社会になりますと、子どもの独立が、精神的にも物理的にも早いわけです。ヨチヨチ歩きが出来るようになった時から一人前になるわけです。子供は親をたよらなくなる。例えば、火は木をまさつして作るということも4才ぐらいの子供がやる。また母親が畑へ行っている間、4才ぐらいの子が小さいやっとな歩けるような子と留守番して、家の隅にころがっている芋をもってきて、火をおこして焼芋をつくり、皆で食べる。それに、母親のあとを慕ったりはしません。部族の全てが自分の保護者だという認識があるということもありますが、子供はいつまでも母親にくっついてはいないということです。一方、大人の方も、子供の人格を一個の人間として認めている。子供の方にも自覚といえば少しオーバーですけど、非常に早くから“ヒトのやり方”を習得するわけです。物質生活は、非常に貧しくても、人間中心の社会がそこに生きているわけです。子供が母親から早く離れるということで、愛情の問題がどうであろうかということになりますが、単純な生活の中でも、非常に細かい愛情というものがあります。それが一個一個の家族の一員というのではなくて、やはり部族の一員ということで、非常に違いがあるわけです。

それから、私が向こうにいた時に感じたこ

とですけど、当時、日本の母親が子供を捨てるということがはやりました。しかもロッカーの中に捨てるというのが続きました。新聞で知って、ニューギニアの人びとに話しますと、みんな息をスーッと吸ってこわがったのです。なんて野蛮人なんだろうと。「野蛮」という言葉を使いました。なんて野蛮な人間がいるのだろうか、そんな人間は信じられない、その人間は手と足があったかというろいろ聞いてきました。そういう文明人の生命に対する無頓着さ、そういったことに対して、改めて考えさせられるものがありました。ただ、ロマンチックに「自然に帰れ」とか、そういう

今から100年も200年も前にヨーロッパの思想家が言った甘い次元の未開社会に対する郷愁とかではなくて、もう一度本当に地球上で健全な人間が生きているとしたらどんな所かと考えた時に、わたしたちはもう少し、文明社会の日常の生活においても反省しなければいけないことが出てくると思うのです。

略 歴

東京大学社会学研究科博士課程修了 社会学博士
オーストラリア国立大学高等研究所、米国東西文化センターを経て1973年より金沢大学法文学部助教授
1961年よりポリネシア、メラネシア、ミクロネシアで社会人類学の実地調査を行う。